

シリーズ④ 地域の目



日本ウミガメ協議会会員

小林 茂夫

(こばやし・しげお)

いつの間にか、あれから八年



八年前、はるばる来たぜ沖縄へ...とルンルン気分です空港に降りた。棲家を探すため一年以上前から何度も降りたている空港だが、今日は格別だ。でもこの時、終の棲家とするつもりはなかった。

当時、「あなた沖縄病?」と聞かれた。沖縄病の意味が良く分からないので、「いえ糖尿病です」と答えていたが、沖縄を選んだ理由のうちに、転地療法があった。

八年後の今、女房の喘息はピタリと鳴りを静め、私の花粉症も何処かへ飛んでいつてしまった。喘息は、季節の変わり目に引く風

邪が引き金になることが多い。四季でなく二季(?)の沖縄では風邪を引く回数が少ないうえからかも知れない。花粉症は元となる杉がここには無い。症状が出たても出られないのだから。一方糖尿病は、転地療法で治る代物ではなかった。トホホホ...

「わたし沖縄病です」と公言する輩が定住目的で、毎年二万人位訪れるという。でも住みつくのは割程度。ワンサカくる割には定住率が悪い。沖縄仮病だつたのだから。本当の沖縄病は掛かったら治らない。私もここが終の棲家となりそうだ。

八年前、来たばかりの頃、「なんでそんなに早足で歩くのサ?」と聞かれた。八年後の今、久々に帰省した東京の雑踏の中、突き飛ばされながら歩く自分がいた。「まったく東京で、なんでこんなに忙しい人間が多いんだ。狭い日本そんなに急いでどこへ行く」。あゝあゝ、とつとつ沖縄のヨシナヨシナペースにはまたか。

八年前、旅立つ私に「広い日本よりによて、どうして沖縄なんだ?」と聞かれた。八年後の今、

訪れた友に「あこがれの地で、何やってんのかと思えば、ごみ拾いかよ」と言われる。「ちりだけでなく犬や猫まで、なんでポイポイ捨てるんだ。ワジワジ」。でもちり拾いも八年続ければフラーを通り越して、奇特な人と思われたらしい。沖縄総合事務局から表彰された。イッペー、ニヘーデビル。

八年前、沖縄戦を少々知るのみで、歴史・文化はほとんど知らなかった。観光雑誌に、農業神事にはミルク神が登場すると書いてあった。エッッ! 沖縄には牛乳の神様がいるの? 八年後の今、訪れる観光客に名所旧跡の案内をしている。それだけではない、恐れ多くもウチナンチューを前に、沖縄の自然神・遠祖先神の説明までしている。本土の人達に忘れ去られた神々が、ここでは人々の心の中に宿っている。多くのヤマトンチーは、天照皇大神を祀る神社神道の神しか知らない。でも「テシヨウウコウタイジンつて何サ?」と聞かれたときは慌てた。しかしミルク神を牛乳の神と間違えた自分と大差はない。

八年前、ウミガメが爬虫類だとは知らなかった。本土にも水族館は数多くある。でもウミガメがいる水族館は少ない。八年後の今、そのウミガメを守る活動をしている。「ウミガメは満月のとき産卵

するんでしょ?」と聞かれる。残念ながら月の満ち欠け、大潮・小潮は関係ない。満月の産卵はサンゴだ。サンゴは自分の子孫をつでも多く残すため、バンドフ(卵)精子が入ったカプセルを遠くに運ばなくてはならないので、その条件が適う満月(大潮)に産卵する。ウミガメの産卵シーズンは四月、九月。産卵はほとんど深夜に行われる。昔ならオバケか泥棒しか起きていない、草木も眠る丑三つ時、声を殺し、ただひたすら産卵を見守る。産卵周期は十四日。例えば一日に産卵したら十四日後再び産卵する。一匹が一年に産卵する回数は、四〜五回。一度に産む数は約百個。年間約五百個の卵を産むが、生き残れるのは三千分の一ともそれ以上とも言われる。一匹のウミガメが六年間卵を生み続け、残る子孫はたったの一匹だけということになる。自然界の厳しさが伝わってくる。

でも沖縄では、「ウミガメは食べるための水産資源で、保護の対象動物ではない(県水産課の話)」という。アキサミヨ。ま、食べつくされるまでは、まだ間があるだろう。それまでは亀楽(きらく)な稼業と洒落こんでウミガメを見守り続けることにしよう。